

第三卷 第三號 昆 蟲 昭和四年十月

東京昆蟲學會

Vol. III, No. 3 KONTYŪ Oct., 1929

Tôkyô Entomological Society

Notulae Cimicum Japonicorum [II]

江 崎 悌 三

(4) 日本内地未記録の科ヒゲブトカメムシ科 Phymatidae に
就て。

ヒゲブトカメムシ科 Phymatidae は日本内地では未記録で、従来臺灣から私が一種ヒゲブトカメムシ *Amblythyreus angustus* WESTWOOD を記録したのが、本邦版圖内の唯一の記録である。* ここに御紹介しようとするものは、嚴密なる意味で言へば日本内地ではないが、南樺太の産で、最近古川晴男氏によつて採集されて、その標本を同氏から拜借したものである。元來 Phymatidae はカメムシの中では種類の少い科で、既知の種數は僅かに約百五十種に過ぎず、然もその大部分は熱帯産のものである。従つてこの科のものが臺灣に發見されるのは敢て奇とするに當らないが、内地の各島を飛ばして、突然樺太から發見されたとなると、聊か珍とせざるを得ない。

* 臺灣博物學會々報、xii, p. 54-55, 1922; Ann. Mus. Nation. Hung., xxiv p. 164, 1926.

この熱帯性の Phymatidae の中で、大部分は新世界即ち中、南アメリカに産し、アフリカ及濠洲には一種も産しない。只一属 *Phymata* LATREILLE のみは新、舊兩北洲に産し、比較的北まで分布してゐる。歐洲に産するものは、僅かに二種、北アメリカに産するものは六種ある、歐洲産二種の中 *Phymata monstrosa* (FABRICIUS) は僅かに地中海沿岸に限られてゐるのに反し、他の *Phymata crassipes* (FABRICIUS) は分布遙かに廣く、イギリス及スカヂナヴィアを除く歐洲一帯、北はフィンランドより南は地中海の兩岸、ロシア、コーカサス及東シベリアまで産する。従つてこの種が今回南樺太から發見されたとすれば、特に怪しむに値しないわけである。次に圖と簡単な記載を御紹介する。

Phymata crassipes (FABRICIUS), 1775

ヒメヒゲブトカメムシ(新稱)

體は稍々扁平にして、細長く、前肢は膨大し、前胸背及腹部の兩側薄葉狀に突出して、一見頗る奇形を呈す。體長 9mm. 前胸幅 3.3mm. 腹部最大幅 5mm.

色彩は大體に於て黒褐色を呈す。體の下面は黄褐色乃至褐色にて、稍々不判然なる不規則の模様を散在す。複眼は美しき褐色。觸角、口吻、單眼、lora, buccula 等は黄褐色、肢は何れも褐色にて、爪は黒色。頭の上、前胸背、小楯板、半翅鞘は黒褐色。腹部の背面にて半翅鞘の縁と接合板 (connexivum) との間にて露出せる部分は黒褐色、接合板中、第一節及第二、第三節の外方は黄白色にして、黒褐の點斑を散在す。第三節の大部及第四節は黒褐色にて、第五、第六と次第に淡色となり、美しき褐色に變ず。

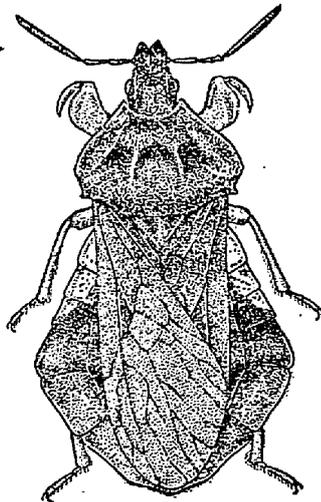


Fig. 1. *Phymata crassipes*
(FABRICIUS).
ヒメヒゲブトカメムシ

頭部は頭楯の先端にて二岐に分れ、頭頂の兩側は並行して隆起し、單眼はその側縁に接して存す、複眼は側方に位置し、扁き半球狀

にて、少しく突出す、觸角は複眼の直前に存し、第一節太く短かくして、頭楯の下に隠れ、上方よりは殆んど見えす、第二節は第一節の凡そ一倍半の長さを有し、遙に細く、第三節は第二節より僅かに短く、明かに細し、第四節は長大にして、第一より第三の三節を合せたるものより少しく長く、野球用バット形に近く、先端に於て細まり、細毛を密生す。口吻はサシガメ科の夫れに似て太く且短小なり、外觀三節よりなり、薄葉狀に突出せる buccula の間に隠れて側方よりは見えす、先端は前基節に達せず。前胸背は側方に發達し、その縁は少しく隆起す、前縁は凹陷しその兩側は銳角をなして、前方に突出す、中央には後方に向つて發散せる二條の顯著なる隆起あり、又側方に於ては側縁と並行して、凹陷す、側縁は後方に近く内方に向つて彎曲し後縁と會する所にて、著しき棘狀の突起をなす、後縁は中央部に於て後方に突出す。小楯板は小さく稍々等邊三角形に近く、側縁及正中線に沿ひて少しく隆起す。半翅鞘はよく發達し、殆んど腹端に達す、爪狀部は細く、革質部も細長く、前縁(costal margin)に於ては、全長の凡そ五分の三を占む、膜質部頗る大きく、殆んど透明、脈は顯著なり。前肢は異常に變化し、捕獲肢をなす、基節は脚窩内に隠れて見えす、轉節頗る長く發達し、腿節は最も強大にして著しく太し、その内側下縁の中央より少しく基部に近く、顯著なる棘を有し、脛節の先端は屈折して、二の棘と共に捕握の目的を達す、脛節は先端に向ひて次第に細く、先鋭し、跗節は二節よりなり、頗る短小にして、第一節は頗る短く、第二節は長く小さき一雙の爪を有す、この跗節は脛節に比して頗る小さく、且脛節の内側に存する溝の内に隠れたるを以て見る事困難なり。中肢及後肢は略々同様の構造を有し、通常の歩行肢にして、後肢の方中肢より遙かに長し、跗節は何れも二節にて、第一節は第二節より著しく短く、爪は一對にて小さし。腹部の兩側は薄葉狀に突出し、且上方に彎曲す。第四腹節に於てその幅最も廣く、その部分にて殆んど角をなして、後方に向つて幅を減す。腹部の下面に於て、正中線に沿ふ部分は稍々龍骨狀をなす、氣門は顯著にして、各節の接合腹板に近く、その内方に存す。

今回採集された標本は昨 1928 年七月二十三日、古川晴男氏によつて、南樺

太富内(トンナイ)にて発見された一雌で、同氏所蔵、ここに同標本より、圖と記載を作つた次第である。

元來この種には腹部の幅について多少の變異があり、本標本の如きも、私の有する歐洲産の標本三頭と比較すると頗る幅の廣いもので、所謂 var. *coarctata* FLOR に屬すべきものである。この「變種」は FLOR⁽¹⁾によつて南佛國から記載されたもので、スペイン・イタリーから知られ、又 AUTRAN 及 REUTER⁽²⁾により東シベリア Chabarofka (Amur 地方、GRAESER 採集) から記されてゐる。然しこれは特に腹側部の發達した個體に過ぎないので、「變種」を構成する程のものでもなく、HANDLIRSCH⁽³⁾ は本科のモノグラフ Monographie der Phymatiden 中に記して曰く、[p. 149]

„*Ph. crassipes* ist nicht sehr variabel. Die Form mit stärker erweiterem Thorax und eckigen Connexiven wurde *coarctata* genannt; es sind jedoch von dieser Form bis zur normalen alle Uebergänge vorhanden“ と。

最後に貴重なる標本を貸與された古川晴男氏に感謝の意を表する。

(5) 日本内地産唯一のクビナガカメムシ科 *Henicocephalidae* の椿象に就て。

クビナガカメムシ科 *Henicocephalidae* は今日まで、日本内地と臺灣とから各一種づつ知られてゐて、臺灣産のクビナガカメムシ *Henicocephalus collaris* WALKER に就ては、私が嘗て述べたことがあるが⁽⁴⁾、内地産の *Henicocephalus lewisi* DISTANT に就ては、未だ本邦の書籍に載つたことがない様なので、ここに圖と記載とを發表して、諸賢のこの昆蟲に對する御注意を御願ひしたいと思ふ。

Henicocephalus lewisi DISTANT, 1903

ヒメクビナガカメムシ(新稱)

(1) Die Rhynchoten Livlands, i, p. 404, 1860.

(2) Rev. d'Ent., vii, p. 200, 1888.

(3) Ann. k. k. Naturhis. Hofmus., xii, p. 127-230, tab. iv-ix, 1897.

(4) 臺灣博物學會々報, xii, p. 56, 1922.

Hemicocephalus lewisi DISTANT, Ann. Soc. Ent. Belgique, xlvii, p. 53, 1903.

體は頗る扁平で、且細長く、頭部は著しく長く前方に突出し、肢は通常であるが、前肢は稍々太く、翅は發達するも、薄質で、角質部と膜質部との區別なく、脈は頗る顯著である。體長 5.5mm. 前胸幅 1.3mm.

體は一様に淡褐色で、肢、翅なども全く同じ色を呈し、多少の濃淡があるのみで、頭部は少しく濃色、複眼は黒褐色を呈する。

頭部は頗る異形を呈し、細かき剛毛を密生す。頭楯は前方に鋭く突出し、buccula はその下方より頭楯の先端を越えて前方に突出する。頭部背面は中央より少し後方にて深く縊れ、前半は正中線に沿ひて少しく隆起し、前方はその幅著しく狭くなりて、頭楯を形成す。後半は殆んど球形をなし、正中線に沿ひて顯著なる凹陷線あり、剛毛の密生特に多く、後端に於ては一層密にして、且剛毛の先端は稍々鉤状に曲る。複眼は顯著にして球形に近く、稍々聚眼式にて、頭部の縊れたる部分に位置す。單眼は頭の後半、縊れより後方に位置し、少しく側方に向く。觸角突起 (antenniferous tubercle) は顯著にして、著しく側方に突出す。觸角は長く、四節よりなる、第一節は頗る短く且太く、幅よりも僅かに長し、第二節は第一節の二倍を超え、先方の方少しく太くなる、第三節は長さ第二節の凡そ二倍にして、且これより遙かに細く、先端に向つて次第に長き剛毛を密生す、第四節は第二節の凡そ三分の二の長さを有し、略々紡錘形を呈し、剛毛を密生す。口吻は太く且短く、複眼の前縁に達するのみ、外觀三節よりなり、第一節は短く、第二節最も長く、先端に向つて少しく細まり、第三節は頗る短小なり。前胸背も亦頗る奇形を呈し、前方は幅頗る狭く、後方に向つて、著

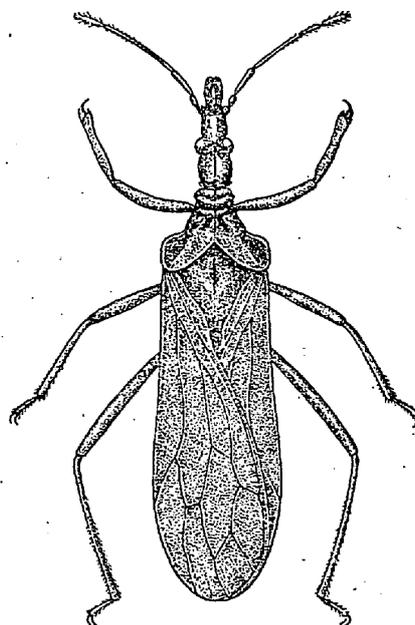


Fig. 2. *Hemicocephalus lewisi* DISTANT.
ヒメクビナガカメムシ

しく擴がる、前方の幅狭き部分は、深き溝を以て襟狀に區劃せられ、前側方に向ふ一對の角狀突起を有す。その後方に又これと相似たる角狀突起及稍不規則なる瘤狀突起各一對を有し、この中央に正中線に沿ひて深き凹陷線を有す、後半は著しく幅廣くなり、後部の側縁は略々平行、後縁は中央にて尖端をなして、顯著に前方に向つて彎入す、これ等の縁は多少隆起せる縁をなす。小楯板は判然せるも、その輪廓不判然にて、後縁は圓味を帶ぶ。半翅鞘は稍々厚き膜質にてよく發達し、革質部及膜質部の區別なし、脈は頗るよく判然し、中脈と第一肘脈との間に二個の横脈を有す。肢はあまり變化せざるも、稍扁平なり、前肢に於ては、腿節と脛節と略々等長、跗節は一節にて頗る短く、その先端に彎曲せる強大なる一爪ありて、捕獲肢を形成す。中肢と後肢とは略々同様なるも、後者の方前者よりも長く、又脛節は腿節よりも長し、跗節は二節よりなるも、第一節は頗る短く、一見唯一節よりなる如く見え、二爪あり。腹部は細長き頗る扁平なる舌狀をなし、接合板は半翅鞘に被はれて、通常的位置にては上方より見えす。腹面にては顯著なる六個の腹節と、著しく短小なる生殖節とを見る。

この種は本邦にては極めて稀なるが如く、私は十餘年間未だ一頭も採集したことがない。私の自身研究した標本は London の British Museum に存する DISTANT のタイプ (LEWIS 採集、産地不明) の外に下記の三標本で、これ等は何れも私の所藏品で、且私の知つてゐる標本の全部である。

- 1 ♂ (?) 播磨産、採集時不明、井口宗平氏採集
- 1 ♂ 岐阜産、1919 年六月七日、竹内吉藏氏採集
- 1 ♀ 福岡産、1928 年七月八日、安松京三氏採集

元來この屬のカメムシには蚊の如く、多數空中を群飛する性質のあるものがあつて、私も上記の *Hemicocephalus collaris* WALKER に就て臺灣にて、この習性を觀察したことがあるが、本種は上記の如く頗る稀品で、未だかくの如く、一時に多數の個體の觀察されたことがない。

最後に貴重なる標本を惠與された竹内吉藏、安松京三の二氏に感謝の意を表する。

(6) 美麗なる臺灣産マキバサシガメの一種に就て。

上記の表題の下に記さうとするカメムシはベニマキバサシガメ(新稱) *Aristonabis elegantulus* SCHUMACHER であつて、1914年に記載されたもので SAUTER が臺灣南部の鳳山にて採集せる標本に基くもので、未だ本邦の書籍に記録されない美麗種なので、Berlin の動物博物館 (Zoologisches Museum) 所藏のタイプに基いて、ここに圖説することとした。この *Aristonabis* といふ屬は元來東洋州獨特の屬で、1909年 REUTER 及 POPPIUS によりメンタヴェイ産の一新種 *Aristonabis pulcher* REUTER et POPPIUS を模式種として創設せられ、後に SCHUMACHER (1914) は臺灣及ボルネオより、又 BERGROTH (1918) はミンダナオ及ルソンより夫々各一種を記載し、現在では合計五種知られてゐる。何れも稍々扁平な朱紅色と黑色との斑點を有つた美麗種である。

Aristonabis elegantulus SCHUMACHER, 1914

ベニマキバサシガメ

Aristonabis elegantulus SCHUMACHER, Ent. Rundsch., xxxi, p. 79, 1914; ESAKI, Ann. Mus. Nation. Hungar., xxiv, p. 169, 1926.

體は細長く、本科のものとしては著しく幅廣く、前胸背後部以下は體側殆んど竝行す。背面は扁平なるも、腹面は相當に凸出す。體長、♀ 6.5mm. 前胸幅 2.5mm.

色彩は大體朱紅色にて、黑色の斑紋多し。頭部は朱紅色、複眼及單眼は暗褐色、觸角第一節は朱黃色、第二節は黒褐色、第三及第四節は暗黃色を呈す。口吻は朱紅色なるも、末節は暗色を帶ぶ、前胸背は朱紅色なるも、前縁は黑色を呈す、小楯板は全部黑色。半翅鞘は革質部の基部の半分及その先端、爪狀部の基部の三分の二は朱紅色にて、残りの部分は黑色、膜質部は黑色なるも、基部の革質部と連る部分は淡黃褐色を呈す。前胸下面は朱紅色、中胸及後胸下面は黑色、肢は全部朱紅色なるも、特に脛節及跗節には黄色の長毛密生す。爪は黑色。腹部は背腹兩面共に朱紅色、第五及第六腹節下面の兩側、及生殖節には不規則なる黒斑あり。

體全體(半翅鞘の膜質部を除く)に長剛毛を密生す。

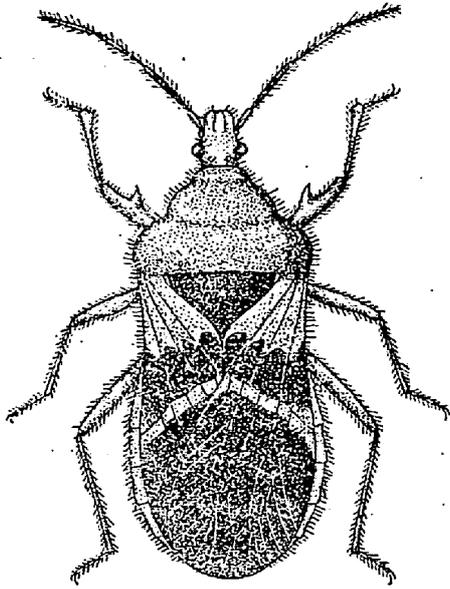


Fig. 3. *Aristonabis elegantulus*
SCHUMACHER. ペニマキバサシガメ

頭部は頗る短く、長さは幅の二倍に達せず。觸角は絲狀、第一及第二節は略同じ太さにて、第三及第四節はこの二節よりは遙かに細し、第一節は最も短く、第二節は最も長く第一節の二倍半に達し、第三節は第二節より短く、第四節は第三節より少しく短し。複眼は半球狀、前胸背に接せず。單眼は複眼の後縁を連ねたる線に接して位置す。口吻は長く、比較的細く且長く、中胸部の中央に達し、第一節は短小、第二節は最も長く、その先端は前基節の前縁に達す、第三節は第二節の凡そ四分の三の長さを有す。前胸背は長毛の密生特に著しく、前縁は後縁に比して著しく幅狭し、略二ヶ所に於て縊れ、前端は細く、稍不顯著なる襟狀をなし、又中央部にて縊れ且少しく後方に向つて彎曲せる淺き溝をなす、又正中線に沿ひ幽かなる縦の凹陷あるも、長毛の爲に一層不明瞭となる。小楯板は略倒三角形をなし、側邊は少しく彎曲し、表面は平なり。半翅鞘はよく發達し、その先端は僅かに腹端より突出す。革質部及爪狀部には長毛を叢生し、且明瞭に膜質部より分離し、膜質部には毛を缺く。革質部は前縁(costal margin)にては半翅鞘の長さを占むるも、面積は膜質部に比して頗る小なり。肢は何れも相似たるも、前腿節は他の腿節に比して特に太く、又内側の中央より少しく末端に近く、強大なる棘狀突起あり。中腿節は先端に近づきて細まる。脛節は腿節より著しく細く、前肢に於ては先端にて扁平となる。跗節は三節よりなり、頗る細く、爪は細く且長し。腹節は正常にして、腹面各節の後縁に沿ひて特に長き毛を密生す。

上記の記載及圖は SAUTER により 1910 年一月、鳳山にて採集された♀によつて作つたものである。